京都教育大学ＦＤニュース

No.103
2024 年 3 月 15 日
京都教育大学ＦＤ委員会

****

本学におけるＦＤ活動の一環として実施している「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。
今回のＦＤニュースでは、第 2 回ＦＤ研修会、授業アンケートの活用状況調査および 2023 年度後期教育学部授業中間アンケート実施結果調査、について報告いたします。

****

１．2023 年度第 2 回ＦＤ研修会について

2023（令和 5）年度の第 2 回 FD 研修会は、11 月 22 日の教授会に先立って 13 時より 1 時間弱の時程で実施されました。研修会全体のテーマは「京都における小中一貫教育と小学校教科担任制の現状」というもので、教職キャリア高度化センターの先生方 2 名に話題を提供していただきました。担当は、小中一貫教育が山下和美教授、教科担任制が椙山直美准教授です。

今回のテーマは、カリキュラム編成や教科担任という相互関係が深い今日的な課題に焦点が当てられたものでした。そのため研修会参加者からのアンケートにおいても、話題の相互関連性を高く評価した回答がいくつも得られました。各々の話題の概略を簡潔にまとめると次のようになります。

まず小中一貫教育に関しては、最初に小中一貫教育の導入経緯やその狙いが示されました。なかでも教育内容の質（系統性や連続性）の向上は、いわゆる「中 1 ギャップ」の解消とともに小中一貫教育の命題ともいえる注目すべき点ではないでしょうか。他方、小中一貫教育が進みにくい理由として「(小中間の) 文化の壁」が指摘されました。これは後半の話題であった教科担任制を触媒的に位置付けることで壁を低くしたり薄くしたりできるように思われます。「制度の実現には目標や期限の設定が不可欠」との説明は、各機関の組織運営力を問う厳しい指摘であると感じました。

「(小中間の) 円滑な接続」を目指す小中連携教育と「系統的な教育」を目標とする小中一貫教育の違いも分かりやすい説明が得られました。とくに 9 年間の発達段階に着目した各学年で目指すべき児童生徒像は、第 1 学年の「遊びが大好きな学年」から第 9 学年の「なりたい自分、理想の未来に誠実に向き合う学年」まで、子どもの発達段階を熟慮して提案されており説得力に溢れていました。また小中一貫教育が目指す「主体的・対話的で深い学び」については、「見通しや自己調整力を基軸とした探究学習」という説明で一層具体化が図られました。

次いで小学校教科担任制に関しては、この考え方が 2021（令和 3）年度答申において「2022（令和 4）年度を目途に本格導入」され、各校では高学年を中心に行われている状況が最初に説明されました。これは、高学年児童が抽象的思考を行えるようになること、そして教師や学校の側からすれば「個別最適な学び」を担保しやすいことを背景にしているとの解説がなされました。学生の教育実習で公開授業や研究授業を参観していても、高学年では優れたディベート能力をもつ児童が珍しくありません。こうした状況を踏まえれば、子どもたちにとって教科担任制が有効な考え方であることが良くわかります。

教科担任制の長短所の指摘もなされました。長所としては、上述の目標や理想の実現に資することが挙げられますが、短所となり得る視点として「加配の無い交換担当だけでは教員の負担は軽減されにくい」という事実が指摘されました。これは「働き方改革」の実現、そしてブラック職場と揶揄されることもある教育現場では、真摯に考えておくべき課題ではないでしょうか。京都市における実例で示された「時間割編成の難しさ」「配置教員次第の継続性の難しさ」は、教育現場だけでなく、本学でも研究を重ねておくべき課題だと思われます。京丹後市久美浜地区の３小１中による取組も大変に参考となる実例でした。なかでも「得意教科のある教員は強い」

という点は、各専攻領域において能力伸長に励んでいる本学に適合する指摘だと感じました。

今回の研修会の参加者アンケートでは、授業アンケートへの意見や今後の研修会の在り方を含めて、とりまとめ後で約 30 件・約 2,200 字の感想やご意見を得ることができました。第 2 回研修会への評価は、総じて「今日的課題を見据えたテーマで良かった」というものでした。FD 委員会では、頂戴した感想やご意見を踏まえて、更に有益な研修会を企画して参りたいと考えています。教職員の皆様には FD 研修会への一層積極的なご参加を衷心よりお願い申し上げます。

2．授業アンケートの活用状況調査および 2023 年度後期教育学部授業中間アンケート実施結果調査について

2023 年 12 月 11 日（月）～28 日（木）にかけて、各期の後半に実施している授業アンケートの集計結果をどのように活用されているかと、「後期授業中間アンケート」の実施結果について有効性を検証するために、学部授業を担当されている方全員を対象にアンケート調査を行いました。結果を報告いたします。

(1)　回答件数

53 件（うち Google Form からは 14 件。以下、同様）の回答をいただきました。前年同時期の 47 件（17 件）より総数は 6 件（約 13%）増、2023 年度前期は 64 件（15 件）より総数は 9 件（14%）減でした。授業総数や担当者数が異なるため単純比較はできませんが、同程度と言えるでしょう。

web 調査を行い始めた 2021 年前期からは 6 回目の調査となりました。web による回答は前年度まで 30.5～39.6%の間で推移していましたが、今年度に入って前期 23.4%、今回 26.4%と 20%台に落ち込みました。回答総数も上述した 2 回より前は、4 回とも 50 件台で今回と変わりないことから、仕事の効率化や回答数の増加には寄与していないということが言えそうです。

(2)　授業アンケートの活用状況調査　（＊以下、%は四捨五入のため 100 にならない）

問１　過去の授業アンケートの結果を 2023 年度後期の教育学部の授業に反映させている。

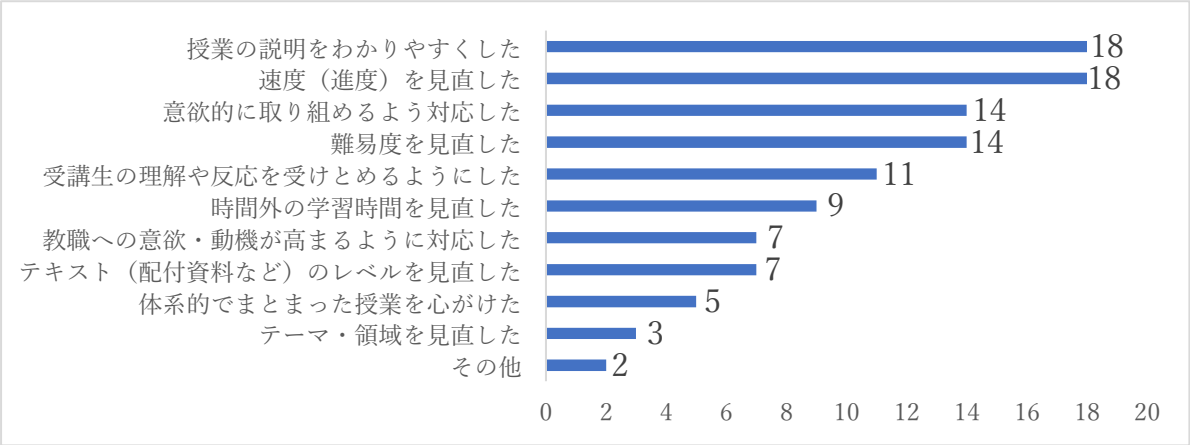
「はい」：48（91%）　「いいえ」：1（2%）　「過去に授業アンケートを実施していない」：4（8%）

問２　授業に反映させていない理由についてお聞かせください。　＊自由記述

「今学期が初任のため」

以上より、事実上、回答者の 100%が今年度の授業に反映させている結果となりました。

問３　授業に反映させた内容についてお聞かせください（複数回答可）。



「授業の説明をわかりやすくした」、「速度（進度）を見直した」がともに 18 件で、最も多く受講生の意見を反映させた事柄となりました。これは昨年度に最も多かった「難易度を見直した」、「受講生の理解や反応を受けとめるようにした」とは異なっています。また、今年度の上位同率ベスト 3 には「意欲的に取り組めるよう対応した」が入っており、学習指導要領が求める「主体的に」取り組む姿勢が大切であることを学生に伝えたいという表れかもしれません。

なお、「その他」として「Google classroom の利用」といった ICT 活用や、「授業のやり方がこれで良いという確信を持ちました」といった授業改善に伴う手ごたえについての言及が見られました。

(3)　2023 年度後期 教育学部 授業中間アンケート実施結果調査

問１　独自作成のものも含め授業中間アンケートを実施した。

「はい」：44（83%）　「いいえ」：9（17%）

問２　授業中間アンケートを実施しなかった主な理由についてお聞かせください。

＊大まかに分類したものを具体例とともに示します。

A：別の方法にて（3 件）　・ミニ課題で授業者の声を聞けるため

B：時間がない（2 件）　・授業を進める方が大切と判断したため

C：受講者が少ない（1 件）　・受講生が 5 名以下のため

これらの 3 つの分類は昨年度と同様で、件数が異なるのみです。また、これ以降のアンケートを実施したことを前提にした設問では 45 件の回答があり、問 1 の 44 件は誤りの可能性があります。したがって、44＋3（別の方法）＋1（誤り）の 48 名（91%）の方が、受講生から情報を得たと考えられます。

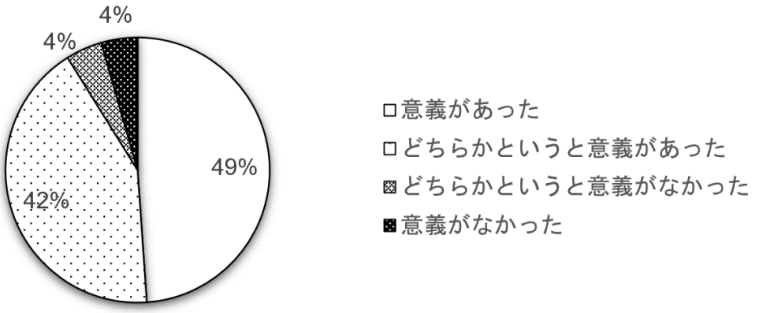
昨年度も 76%がアンケートを実施、実施しない理由はほぼ変わりません。以上より、中間の段階でも 9 割を超える方が、何らかの形で受講生の声を拾おうとしている様子が、継続して見られていることがわかります。

＊以降の有効回答数は授業中間アンケートを実施した方の 45 件となります。

問３　使用した様式についてお聞かせください。

「FD 委員会の様式」：38（84%）　「独自の様式」：7（16%）

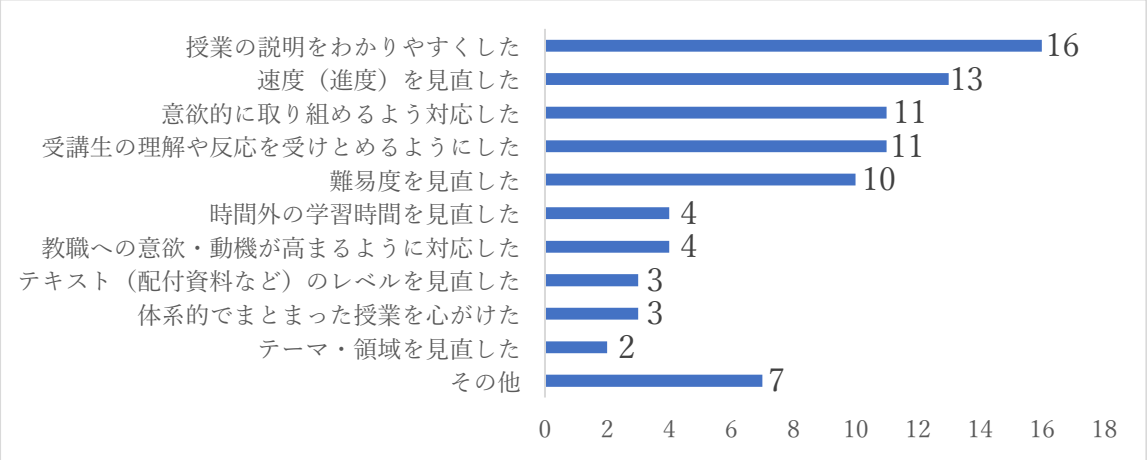
問４　中間アンケートを実施した結果についてお聞かせください。



以上より、80%以上の方が FD 委員会の様式でのアンケートを実施し、「どちらかというと」も含め 90%以上の方が肯定的な「意義があった」という回答でした。なお、独自の様式で実施された方は 100%が肯定的な回答となっていました。

問５　授業中間アンケートの結果について、受講生と話し合ったり言及したりされましたか。

「はい」：30（67%）　「いいえ」：15（33%）



問６　授業へ中間アンケート結果を反映された内容についてお聞かせください。(複数回答可)。

授業中間アンケートの趣旨である「リアルタイムに改善する」ことができているかどうかを詳しく見てみます。

問５「受講生と話し合ったり言及したりされましたか」、問６「反映された内容について」のいずれもされていない方は、問４で「意義がなかった」とされた１名のみでした。この方は以降の問７でも「現状のまま」と回答していることから、学生から目立った回答がなかったため、アンケートの意義がなく、授業に反映させる必要はなかったというところに落ち着いたことが推測されます。一方、問４で否定的な回答をされた方も含め、何らかの回答をされた方全員が、問５で「はい」あるいは問６で何かの項目を選択されました。これより、中間アンケートを実施された方ほぼすべてが授業改善をタイムリーに図ろうとされたことがわかります。本学の強みとして誇っていい点ではないでしょうか。

こうした強みを促進するための参考になる情報として、問６で「その他」を選んだ方の具体的に反映されたことを示しておきます。

・予習動画を作成した反転学習を取り入れた
・要望に対して回答した
・内容について大旨適切と判断できたので現状を継続することにした
・実施した次週に結果をプリントにて配布し、その活かし方について説明した
・学生が疑問に思う内容に追加説明を行った
・配付資料、レジュメについてダウンロードできるようにした
・自由記述の欄に学生自らの授業受講態度の反省や英語への意欲を書かせましたが、それが良かったように思いました

問７　FD 委員会様式の「授業中間アンケート」の設問についてお聞かせください。

「現状のままでよい」：42（96%）　「改善の余地あり」：2（5%）

問８　問７について具体的にお聞かせください。

・学生の自由記述が少ないので、特にネガティヴ意見について、どのような希望があるか、具体的にコメントをもらい、改善に努めたい
・web 回答の導入を考えてもよいのでは（様式ですが）
＊前問で「現状のままでよい」であったが、記入のあった回答
・各日の授業内容を項目にしたもので行います。毎時間、ふりかえりシートを出してもらっているのでいつも理解度は大体把握できています。

この２問からは「改善の余地あり」という回答が２件見られたものの、具体的なものについて「学生の自由記述が少ない」という回答量に関する記述と、「web 回答の導入」という方法に関するものでした。設問に関する具体的な課題や提案は見られなかったことから、設問は現状のままでよいことがわかります。

なお、「学生の自由記述が少ない」と答えた方は、中間アンケート自体を実施しておられないものの、「具体的にコメントをもらい、改善に努めたい」とされており、授業改善への意欲をお持ちであることがわかります。

また、web 回答については Google Forms を使う方法が既に導入され、実施のお願いの紙に方法が記されています。教員各個人が作成する必要があるため、そこに課題があることを述べられているのかもしれませんが、事務局 HP 内「様式集」→「教務課」より作成方法を参照してみてください（非常勤講師の先生方は本委員会事務担当まで）。

以上をまとめます。アンケートにご回答いただいた方からは授業改善を随時図り、現行の方法で支障はないとの考えが主であることが見受けられました。調査にご協力いただいた皆様、どうもありがとうございました。課題としては、アンケートの回答数自体が授業担当者数に比べてそれほど多いものではありません。また、情報提供がされているにもかかわらず web 入力が広まってはおりません。真の実態をつかむためには、このあたりの改善を検討していく必要がありそうです。

****

内容について、問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

ＦＤ委員会委員：中（委員長）、寺田、香川、牛山、亀田
（事務担当：糟谷、村田、西松）